

首都 オタワ

カナダの首都オタワは、今年で設立ちようど百五十年になる。オタワ川、ガテイノー川、リドー川の三つの川に接するこの一帯を材木業者が発見したのは一八〇〇年だが、名前がつけられたのは一八やく一八二六年。その年、リドー運河の建設に当たっていた

技師ジョン・バイ中佐の名前にちなんで、バイタウンと命名された。一八五五年には現在のオタワに改称され、その三年後、ビクトリア女王がオタワをカナダの首都に選んだ。

そして人口も一八三五年のわずか五千人から三十五万人へとふくれ上り、かつこの小さな材木の町は運河を通じてモントリオールやキングストンへとつながる活気あふれる交易港へ、そして連邦政治の中心地へと大きく発展していった。

バイ中佐が掘ったリドー運河(全長二二キロ)は、現在もオタワの中心部をくねくねと、ゆるやかに流れて、冬には世界一長いスケート場に変化して多くのスケート愛好家を迎え、夏になると市民や観光客がボート乗りを楽しむ。

「この偉大な国の首都を、文明と商業

活動の中心から遠く離れた、全く無価値に等しい場所に定めたということは、狂気の沙汰としか思えません……。私は、当地の公共施設に投下された莫大な費用にもかかわらず、今後四年間、オタワが首都になることはあるまいと確信するも



▲オタワ川の岸壁に立つ連邦議事堂

のであります。」

この極秘の予言は、一八六六年、現在のオンタリオ、ケベック両州にあたるカナダ植民州の総督であったモンク卿から、英本国の植民相に宛てて提出されたものである。ビクトリア女王は、その八年前、時の政府からカナダの植民州の恒久的な

首都を選定するよう乞われ、オタワを選んだ。オタワはさし当り最も反対の少ない候補地である、というのが、この問題について最も大きい影響力をもっていた、女王の補佐役で前総督のエドモンド・ヘッド卿が女王に奏上した意見であった。ケベック、トロント、モントリオール、あるいはキングストンのいずれかを選んだ場合には、おおかたの同意を得るわけにいかないことは明らかであり、したがってオタワが妥協の産物であることはエドモンド卿も十分承知していた。

エドモンド卿は、女王に対して、上カナダと下カナダの双方を刺激しない場所としてはこの小さな材木の町しかない、と報告した。事実、オタワは、上下両カナダにまたがる町といってもよかった。地理的には上カナダ内にあつたが、オタワ川を隔てただけで下カナダと接していた。大西洋から五大湖にまでひろがる国の首都としては、荒野のウエストミンスターなど皮肉っぽく呼ばれたりもしたが、その後の歴史は、女王の決定が賢明であつたことを示した。

新しい首都の議会議事堂の建設用地として、オタワ川の水面から約五〇メートルの高さにある、当時ブラック・ヒルと呼ばれていた岩だらけの台地に、二九エーカーの敷地が選ばれた。一九六七年当時の案内書は、オタワについて次のように述べている。「その景観は実にすばらしく、新大陸にもヨーロッパにもこれに勝るところはない。広大な川はそれだけで一箇の美観だが、遠く連なる森や丘の広がり加わるとき、誰もが我を忘れて引き込まれてしまう。この場所から見るシュナイエールの滝は手にとるようで、

ナイアガラの滝よりロマンチックだといふ人もあるほど」。また、ある高名なイギリスの作家は、ブラック・ヒルをエジンバラ城と比較して、エジンバラ城のある場所は、「大変よい場所」だが、市街地から入る時の急な坂道はカナダの首都にない不利な条件である、と語ったことがある。

政府の多くの省庁がケベックから移転してきた一八六五年までに、議事堂と付属の関連部門の建物の建築は、進んでいた。それまで長い間政府機関の恒久的な所在地を待ち望んできたカナダ植民州は、一八六六年六月六日、第一回の議会開会を祝うことになる。しかし、皮肉なことに、この議会はこれが最初で最後になった。カナダの歴史にやがて新しい一章が書き加えられようとしていたからである。

連邦成立

一八六七年七月一日、カナダ植民州はニュー・ブランズウィック州およびノバ・スコシア州と統合して、カナダ自治領を形成することになった。従来のカナダ植民州のために建てられた議会議事堂は、そのまま新しい自治領政府の本拠となった。そのとき、沿岸諸州から新しく選出された議員を取容するために、下院の議場に新たに六四の椅子と三二の机が増設され、新聞記者席十二名分から二二名分に拡張された。

議会議事堂が完成したのは、連邦成立から九年後。大英博物館の閲覧室を模して、多辺形に作られている。あかり窓になつているドームの最上部は、床面からの高さが約五〇メートルで、どっしりと